

現代の学生像

——第四回学生生活実態調査から——

久 川 太 郎

I はじめに

日本の大学は第二次大戦後、民主的改革と占領軍による強制という二面性を持つ教育改革で、それまでのエリートの大学から大衆の大学へと変貌をはじめた。むろんそれは日本だけの特異な現象ではなく、世界的な流れを反映したものであった。この変化の背景にはよくとりあげられるように3つの要因があげられる。1は産業の進展と富の増大によって青年をより長く家庭外教育の場にとどめることができるようになった。2に技術革新の急激な進展により学習内容が高度化し、学習完成の心理的ゴールが延長された。3に衛生面の向上や戦争による青年の死がみられなくなったことで青年期の人口が急激に増大したことである。

こうした状況の中で青年は経済力を獲得し、成人期への到達を意図的に延長させ、ひいてはモラトリアムに埋没しようとする傾向が強まっている。多様化し大衆化した大学生が、これらの社会状況と密接に関連した存在であることはいうまでもない。大学という場で起こるさまざまな問題状況は、古くからの問題が新しい装いであらわれた面もあるにしても従来にはなかった新しい問題も少なくないように思える。そしてこのような事態は、わが国だけの問題ではなく、他の先進国に共通する問題でもある。

こうして、この6、7年従来はほとんど問題にされることのなかった「大学での教育」が、大学問題の研究者の集会などの場で重要なテーマとして頻繁に取り上げられるようになってきている。またこれに関連して学生の意識調査や

実態調査も数多く報告され論議されはじめた。他方、このような「大学生の問題」に関する著書が相次いで公刊されたり、高等教育専門誌が「大学の教育」あるいは「授業の特集」を組んだりしはじめた。

高校以下の教育問題が、あれほどやかましく論じられながら、最高学府としての大学での教育に手がつけられなかったのは、大学というところは研究センターであり良い研究をしていれば、それが同時に良い教育になるという暗黙の了解があったのかも知れない。すなわち「真理の殿堂」とか「象牙の塔」とかいわれる言葉に代表されるような近世の大学的な見方が大学側にあったのである。しかしこうした従来の考え方と現代学生の実態との間のギャップがどうしようもないほど大きくなってしまったところに、昨今、「大学での教育」問題があらためて取りあげられはじめた1つの理由があると考えられる。

さて本学では昭和48年に全学生を対象とし、生活実態を正しく把握することを目的としてアンケート調査を実施した。その後4年ごとに調査を実施しており今回は4回目である。前回までは、本学独自の調査項目により実施していたが、今回は私立大学連盟等の実態調査との比較をするため、内容に十分な検討を加えた。こうしてできあがった調査は、私立大学連盟の実態調査を骨子としながら本学独自の項目を加えたものとなった。質問の内容は多岐にわたり、その数も多くなったが、調査結果は本学学生の実態を明らかにするのみならず、他大学との比較もでき、参考になる点も多いと思われる。さら

に今回、初めて集計にコンピューターの導入をはかり、またクロス集計を充実させることにした。現在、クロス集計の作業中であり、今後、最終結果が報告されることになるわけだが、ここではさしあたり単純集計の段階で明らかになった諸点についてそのあらましを見ることにしたい。

Ⅱ フェイスから明らかになること

1. 本学の学生はどこから来るか

——学生の出身地——

本年度の本学在学生の出身地は図1のとおりである。平均で見ると北海道・東北が4.5%、茨城が35%、茨城を除く関東が44%、中部7.1%、近畿1%、中国・四国3.9%、九州2.1%、外国人留学生2.4%である。この傾向はここ10年間

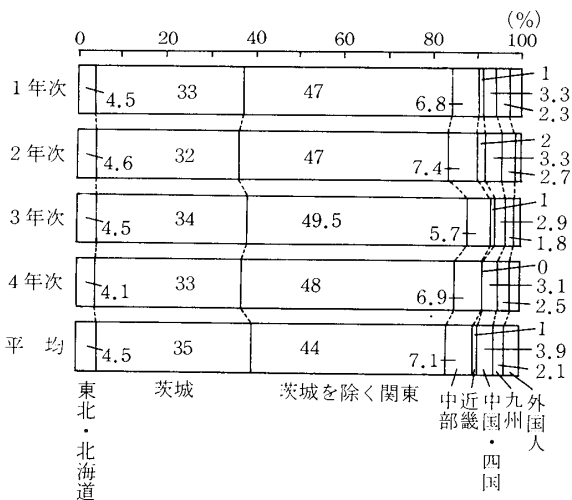


図1 学生の出身地

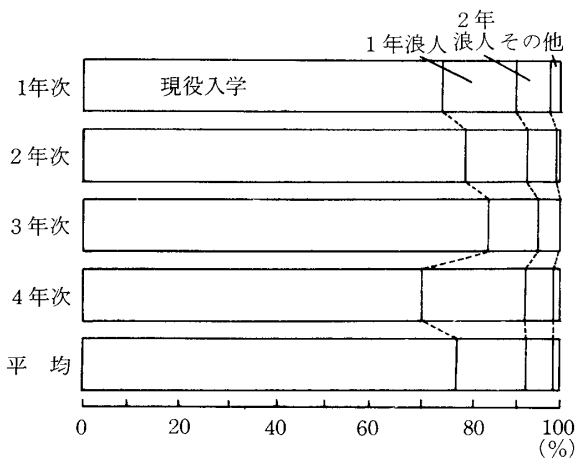


図2 本学への入学

変動がなく、本学創立当初の全国規模の大学から現在では地元茨城あるいは東京・千葉・埼玉を中心とした大学へと移行してきた。

浪人・現役別をみると現役が約74%を占め、次いで1年浪人が15%、2年浪人が7%を占めている。むろん本学の入学試験の3本柱の1つである推薦入試は現役に限られているので、試験入学に限ってみると現役対浪人の比率は1対1となる。全体でみても4人に1人は浪人という割合である。

2. 学生はどこに住んでいるか

——居住場所と通学手段——

自宅からの通学の有無に関する回答は図3のとおりである。これによると自宅からの通学者が約70%を占めている。この傾向は全体として進行しており、前回の調査より約10%増加している。次いでアパート・マンションが22%、賄なしの下宿7%、団体寮6%である。創立間もない頃の卒業生が懐かしく思い出す賄つきの下宿に代表される近隣関係の濃い環境を現代の学生は敬遠する。そのためか竜ヶ崎の町にできる一人用のアパート・マンションは月額3万円以上の家賃で、建築中に契約が終了する程である。部屋の中の設備も電気製品等充実しており、自宅通学生とは違った生活形態をしている。こうした中で、より良い住居を求めて取手、柏に下

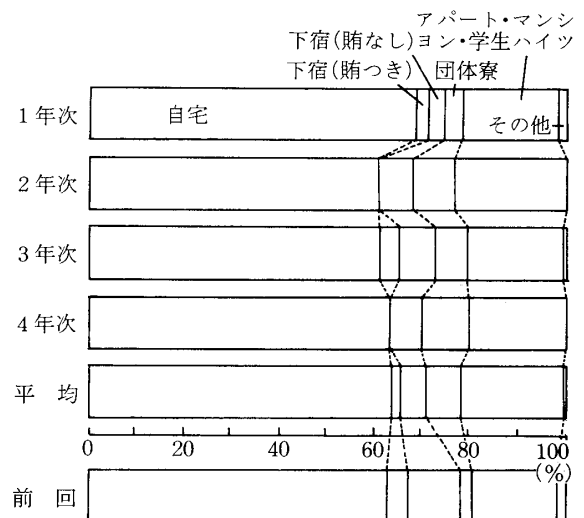


図3 自宅から通学していますか

表 1

		56	57	58	59	60	61
学生総数 (5.1現在)		2,067	2,060	2,087	2,127	2,150	2,330
自宅外通学者数			787	799	752	768	819
竜ヶ崎市内 (学寮含む)	1～2		259	292	292	324	384
	3～		208	215	221	255	258
	小 計		467	507	513	579	642
取手市内	1～2		77	42	29	17	18
	3～		75	78	68	51	25
	小 計		152	120	97	69	43
我孫子 柏 } 市内 松戸 }	1～2		45	39	27	22	36
	3～		33	35	38	37	24
	小 計		78	74	65	59	60
東京都内	1～2		23	26	20	20	23
	3～		35	40	36	31	34
	小 計		58	66	56	51	57
そ の 他	1～2		14	10	8	7	9
	3～		18	22	13	3	8
	小 計		32	32	21	10	17

宿先を求めてきた学生が竜ヶ崎に戻ってくるUターン現象が生じており、現在自宅外通学生の約8割が竜ヶ崎に住んでいる(表1)。クロス集計の際には自宅通学生と自宅外通学生との比較が重要なテーマとなるであろう。

通学手段は水戸方面からスクールバスを利用する学生が10%、上野方面からスクールバスを利用する学生が35%前後であり、スクールバスを利用する学生は全体として45%を占めている。

さて乗用車、自動二輪で通学する学生はそれ

ぞれ29%、14%を占めるが、学年が進むにつれて乗用車で通学する学生が増加し、最上級生では約50%を占めている。新入生の間での会話では自動車の運転免許の取得の内容が第1位であると言われているが、なるほどとうなずける。この現象は立地条件に左右される面もあるが、都内の大学生でも同じことがみられる。大学側としても近年増加の傾向にある本学学生の交通事故防止に対する対策を考え直すべき時期にきていると思われる。

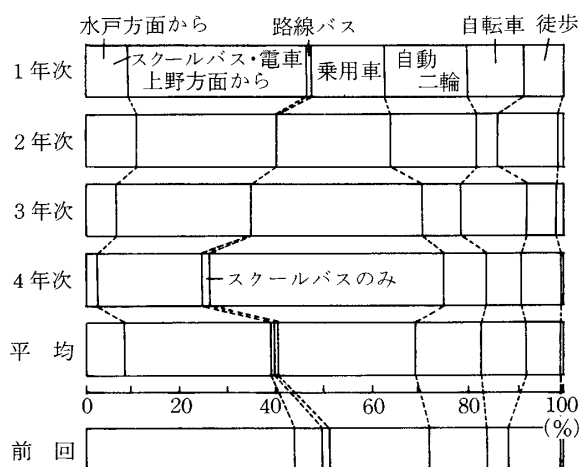


図 4 通学手段

3. 家計を支える人はだれか

——家計の主な支持者の職業——

家計の主な支持者の職業(図5)をみると、民間企業・団体が47%であり、次いで自営業20%、公務員・公共企業・教員18%の順で、他の大学との差はない。

4. リッチな自宅外通学生と切りつめ型の自宅通学生

——学生の経済生活——

明治20年代では大学生の数は300人に1人、大正初期では100人に1人であったから大学生

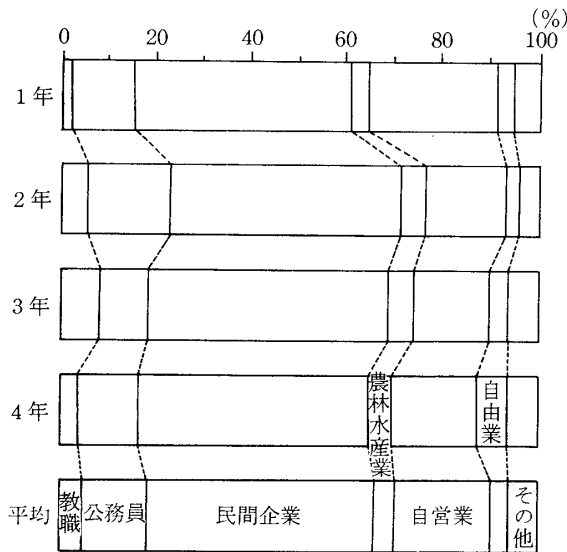


図 5 主な家計支持者の職業

はエリートであったと言える。昭和初期でも10人に1人であったからまだまだ大学生は選ばれた青年であったと言えよう。ところが現在では大学・短大への進学率の全国平均は37%台であり5人に2人が大学へ進学している。こうした状況の中で本学の学生が家庭からもらう1カ月平均の金額（学校納付金を除くすべての額）は、自宅外通学生・自宅通学生の平均が約4万円で

表 2 自宅からもらう1カ月平均金額（自宅・自宅外）

a 自宅通学者

地 域 別	課 程 別	専攻分野別	性 別
関 東 18,720	昼 間 18,100	社会科学 16,190	男 子 16,490
関 西 15,280	夜 間 5,180	人文科学 17,680	女 子 19,020
その他 14,550		理 学 18,260	
		工 学 17,010	
		農 学 17,380	
		医・歯学 41,730	
		芸 術 21,470	
		家政・体育 21,080	

b 自宅外通学者

地 域 別	課 程 別	専攻分野別	性 別
関 東 83,960	昼 間 79,270	社会科学 75,700	男 子 76,900
関 西 73,260	夜 間 42,550	人文科学 74,980	女 子 81,290
その他 63,510		理 学 83,820	
		工 学 79,270	
		農 学 82,750	
		医・歯学 117,500	
		芸 術 82,730	
		家政・体育 70,450	

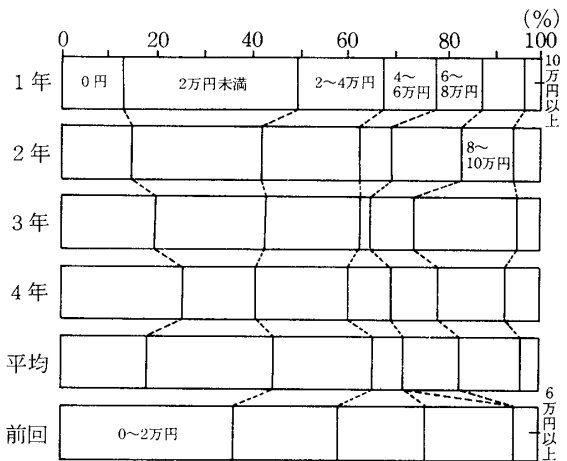


図 6 家庭からもらった1カ月平均の金額
（学校納付金を除くすべての額）

ある。自宅通学生が増加している割に金額が増加しているのは、交通費や食費等の値上がりによるものであろう。また学年別に見ると、高学年になるほど金額が多くなる傾向がみられた。これは私大連盟の調査でも同様であった。私大連盟の調査では自宅通学者は平均17,350円、自宅外通学者は77,780円で全体の平均は31,730円であった。

これら自宅からもらう金額と「家計支持者の年間所得額」との比率を求めてみると、経年的

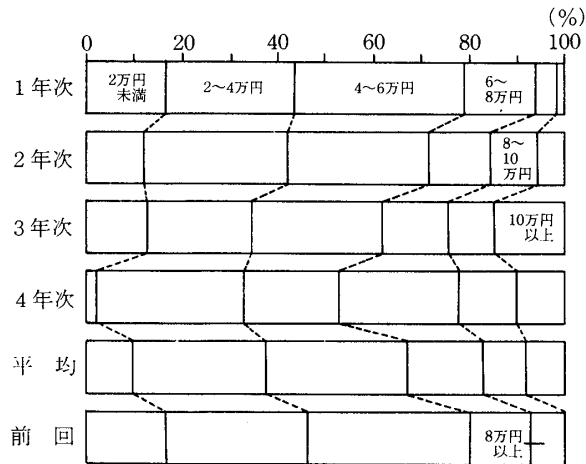


図7 アルバイトの1カ月平均収入額

にはほぼ一致した値、すなわち自宅通学者では約4%, 自宅外通学者では16~17%といった値が得られる。

Ⅲ 学生の経済生活

1. 豊かな収入

——アルバイトづけの生活——

本学の学生のアルバイトによる1カ月の平均収入は約5万円である。これから本学の学生は家からの収入とアルバイト収入をあわせて約9万円で生活をしていることになる。アルバイトによる収入は高学年になるにつれて多くなる傾向にあり、3年生で大きな変化を見せている。むろん自宅からの通学生と自宅外通学生との間には明らかな差がみられる。すなわち自宅外通学生のアルバイト収入は自宅通学生より多い。それは生活、遊びを含めたアルバイトの必要性とも関連があるのであろう。そこでアルバイトの必要性(図8)をみると「アルバイトをしなければ学業の継続が困難である」と「アルバイトをしなくても学業は続けられるが、生活は苦しい」をあわせて約22%である。さらに「小遣いかせぎ」54%, 「経済的にはアルバイトを必要としないが、いいのがあればやる」17%, 「アルバイトをまったく必要としない」4%が続いている。これから本学の学生の約80%が生活のためというより、むしろ豊かな生活を楽しむために、アルバイトをしていると言えよう。前回

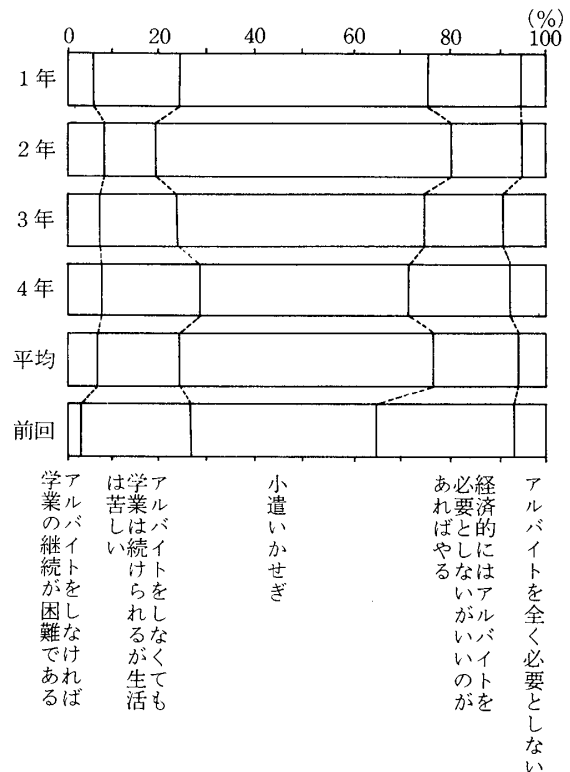


図8 アルバイトの必要性

の調査と比較をしても、学業生活が続けるためのアルバイトの必要性を訴える学生は非常に減少している。

これを本学とほぼ同規模のT大学の1年生と比較をすると、T大学の1年生では自宅外通学生は家からの仕送りが79,380円、アルバイトによる収入が18,810円で合計98,290円、自宅通学生は小遣い15,680円、アルバイト収入23,920円で合計39,600円である。これより本学の学生の場合は前にも述べたとおり、自宅外通学生と自宅通学生を平均して約9万円であるから、本学の学生の生活のリッチさがわかる。しかしこの差の多くが、アルバイト収入によるものであって、見方を変えれば本学の学生のアルバイトづけの生活が問題になろう。

2. 勤労者よりリッチな生活

——学生時代は天国か——

家庭からの仕送り、あるいはアルバイトによる収入の多い現代の学生の生活はどのようなものであろうか。一言でいえば自宅通学生と自宅

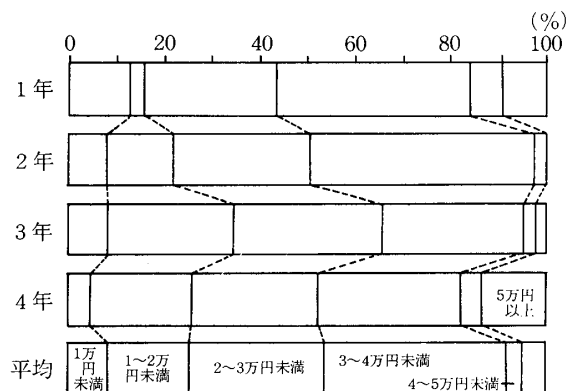


図 9 住居費

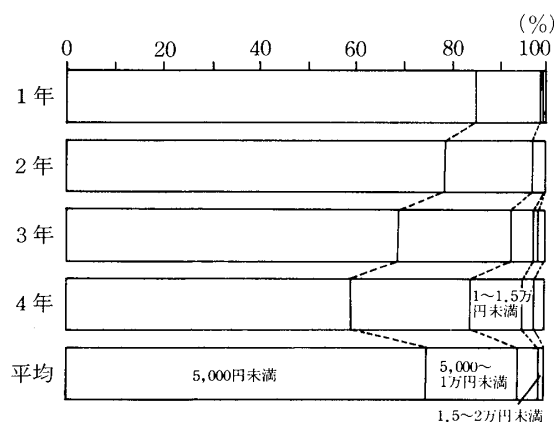


図 10 勉強費

外通学生との間に大きな差がみられる。以下数項目について述べてみたい。

a. 住居費

自宅通学生には住居費は必要ないが、自宅外通学生では次の様な傾向がみられる。アパート代は金額的には学年による差はみられない。1年生31,900円、2年生30,000円、3年生25,000円、4年生29,200円である。現代の学生が好むのは貸間ではなく、ワンルーム・マンションである。最近、竜ヶ崎にもワンルーム・マンションが多く建設されるにつれて、それまで取手、柏、松戸方面に出て行った学生は再び大学周辺へと戻ってくるUターン現象が生じている。現在自宅外通学生の約8割の学生が竜ヶ崎に住んでいるが、部屋の設備も都内のワンルーム・マンションに見劣りせず、都内では4,5万前後のつくりである。

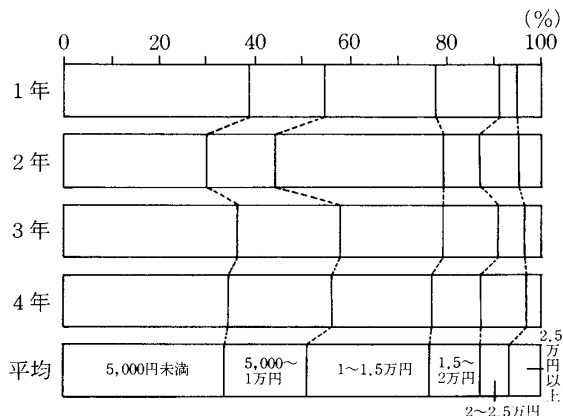


図 11 交通費

b. 勉学費

勉学に要する1カ月平均の支出は全学年を通じて5,000円未満が一番多く、1年生では85%を占めている。学年が進むにつれてその比率は低下しているが、4年生でも60%であり、全学年平均では5,000円未満が74%、金額では3,300円であった。

c. 交通費

自宅通学者と自宅外通学者を含めた平均の交通費は約9,000円で学年に関係なく同じである。しかし本学への通学の範囲が、地元茨城あるいは東京、千葉、埼玉、神奈川であるため、自宅通学者の平均は15,000円前後の交通費であると考えられる。

d. 食費

1カ月平均の食費を見ると18,000円前後で高学年になるにつれて多くなる傾向にある。これは収入の増加による変化だとも考えられる。

学生の支出と収入のバランスをみると、自宅外通学生は、自宅通学生と比較して、残額が多く、その分が貯蓄や繰り越しに回っている。親からの仕送りとアルバイトで入ったお金をせっせとため込む自宅外通学生というイメージが浮かぶ。そして、ためたお金はまず運転免許を取る資金に充てられているようである。次に楽しく豊かな学生生活をするための耐久消費財の支出に充てられる。事実、学生のマンションに行ってみると、そのリッチぶりに驚かされる。ステレオ等の音響装置、さらに電気製品に囲まれ、

VTR まで備えた豊かな生活を、彼らは卒業後も続けることができるのであろうか。最近、卒業後もある一定の期間、親からの仕送りを受ける青年が多い事、さらにはアパート代、食費等の負担を親にしてもらうために結婚後も親と同居をするという例もある事を考えると、青年期の豊かな生活は青年の自立に問題を生じていると思われる。

Ⅳ 生活をエンジョイしている大学生

1. 大学を受験した動機

近年頭打ちになったとはいえ、短大を含めて大学に学ぶ学生が、同一年齢層の中で占める割合は37%台を占めている。これだけ大衆化し、多様化した大学に、学生達は何を目的に進学し、卒業後の人生目標をどこに置いているのであろうか。

本学を受験した動機は「家庭や先生など身近かな人にすすめられて」が22%で、次いで「合格する自信があった」14.7%、「他の受験校が不合格になったときの事を考えて」15.1%、

「地理的に通学が便利である」10.3%であった。この傾向は前回の調査とはほぼ同じである。

私大連盟の調査では、受験動機として「建学の精神や特色、専攻分野の教授陣にひかれた」20.5%、「他が不合格になったときの事を考えて」16.9%、「家族や先生、身近かな人に勧められて」15.6%などが1つのパターンと考えられる。むろん浪人生の動機に「他が不合格になったときの事を考えて」が多くなっているのは当然であろう。

本学の場合は、私大連盟の調査と比較すると、「建学の精神や特色、専攻分野の教授陣にひかれて」は、4.1%である。本学の受験生には、まだ消去法的な選択が多いことがうかがえる。その結果、不本意な入学や、不本意な学部学科の履修といったケースも出てくる。しかし合格する自信を持ちまた目標を持ち受験する学生も14.7%いるわけで、入学者に対する大学側の対応の仕方が重要である。

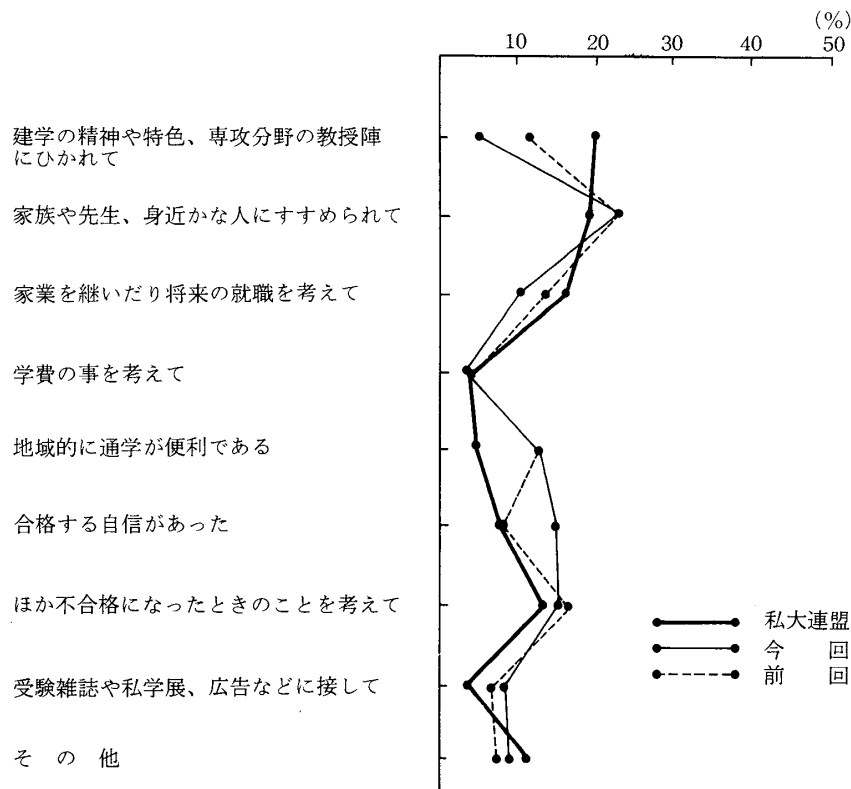


図 12 本学を受験した動機

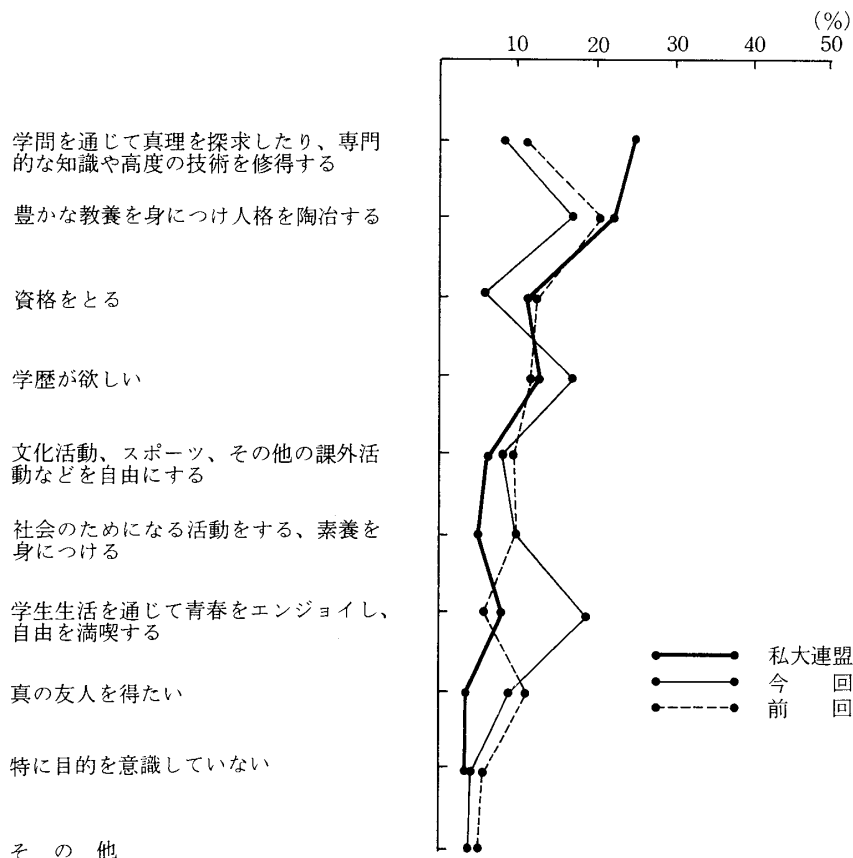


図 13 大学生生活の目的

2. 大学生生活の目的

本学の学生の大学生生活の目的に関する調査は図13である。「学生生活を通じて青春をエンジョイし、自由を満喫する」20%、次いで「学歴が欲しい」17%、「豊かな教養を身につけ人格を陶冶する」16%である。これらから本学の学生はいわば教養志向型であり、「専門的な知識や高度の技術を修得する」などの専門志向型の学生が少ないことがうかがえる。またこの種の質問に対する解答には建前と本音が入りまじっているわけで、本学の学生の回答が、まず現代学生の平均的な意識とみてよいであろう。

これを前回の調査と比較すると、積極的な生活態度であると考えられる「学問を通じて真理を探究したり、専門的な知識や高度の技術を修得する」あるいは「資格を取る」などは非常に減少し、反対に「学歴が欲しい」や「学生生活を通じて青春をエンジョイし自由を満喫する」が非常に多くなっており急激な学生の意識の変

化がみられる。すなわち専門志向型から教養志向型へと急激に移行しているわけだが、特に女性にその傾向が強いように見受けられる。そしてこの傾向は、高校を卒業後、すぐ就職して社会に出たくないというモラトリウム志向とも考えられ、大学は青年期の保育園であるという説もある程度理解できよう。

これを他の大学の経済学部と比較すると、他大学では「良い就職をする」が多いのに対し本学では「真の友人を得る」が多い。私立大学連盟の調査では、「真理の探究、知識や技術の修得」が26.2%、「豊かな教養を身につけ、人格を陶冶する」24.5%と約50%の学生が積極的に大学生生活の目的をとらえている。そして「青春をエンジョイし、自由を満喫する」と答えた学生は9.4%、「真の友人を求める」は6.9%であり本学の調査と非常に異なった結果を示しているが、その差は専攻分野あるいは本音と建前の使いわけであると考えられる。他大学の経済学部での

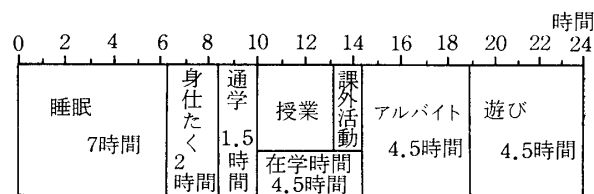


図 14 本学の学生の平均的生活時間

調査で、「なぜ経済学部を選んだのか」という問いに対して「経済を勉強したいから」30%、「とくに理由なし」22%、「就職に有利である」22%、「入学試験の関係でやむをえず」15%であり、これら3つの消極的な理由が56%を占めているのをみると、学生の学部選択の際にもその根底にモラトリアム志向がみられるような気がする。

V 学 生 時 代

1. アルバイトづけの生活

——学生的生活時間——

本学の学生の平均的生活時間のパターンは図14のとおりである。睡眠時間は7時間、身仕たくや食事時間は2時間、通学時間は1.5時間、大学にいる時間は4.5時間（課外活動の時間を含む）、アルバイト4.5時間、遊びや自由な時間4.5時間である。

私大連盟の調査では、睡眠時間7時間、通学時間1時間、在学時間9.5時間（課外活動時間を含む）、アルバイト就労時間1.5時間、遊びあるいは自由な時間3時間であった。

本学の学生の生活時間の特徴として他大学の学生と比較してアルバイト就労時間が長いことがあげられる。このアルバイト就労時間が長いことが、そのしわ寄せとして在学時間を短縮し、課外活動の参加率を低くしているのである。大学にいる時間が私大平均の半分であることは、勉強態度にも大きく影響していると考えられる。

2. アルバイトの就業状態

——アルバイトの現状——

本学の学生で「アルバイトをしたことがない」は6.1%で、「長期の休暇中、授業期間中にかか

わらず恒常的に」が36.2%、「長期休暇中には重点的に、授業期間中には臨時的に」は21.7%、「長期休暇中に重点的に」が22%、「たまに必要に応じて」14%である。恒常的にアルバイトをする学生は高学年になるにつれて増加し、4年生では、46.4%を占めていた。この傾向はどこも同じであって、私大連盟の調査でも、アルバイトをしていない学生は7.7%で、長期休暇中、授業期間中にかかわらず恒常的にアルバイトを続ける学生が35.4%であった。このように現代の大学生はアルバイトをする事は当然であるようだが、このアルバイトづけの生活が、豊かな生活をするために行われ、これによって失われる面も多いことに気づいていないことが問題であろう。

アルバイトの職種は、店員42%、軽作業（配送助手、清掃助手、部品組立、梱包等）24.6%、重作業（土木、建築現場、水道工事の穴掘り、重量物運搬等）11.2%でこの傾向は学年による差はみられない。

さて、前にも述べたように本学学生のアルバイトの就労時間は4時間30分で、私大連盟の平均より非常に長い。そのため大学にいる時間が非常に短くなるというしわ寄せが生じている。私大連盟の調査では、アルバイトの就労時間が1～2時間程度ならば授業への出席度にはほとんど影響がみられないのに対して、3時間以上では授業への出席度が低下してくる傾向がみられた。本学の学生のアルバイト時間の長いことは、学生自身が早急に解決していくべき問題であろう。

3. 授業への参加

——教科書、ノート中心でやや消極的——

本学学生の勉強態度についてみると、授業のみを対象とした場合は42.5%の学生が自主的な、積極的な態度をみせているが、全体的には授業以外にやや消極的な姿勢が目立った。すなわち学生の約34%は、他人のノート、コピーで済ませたり、ただ何となく過ごすわけであるが、この傾向は前回より相当進行している。さらに課

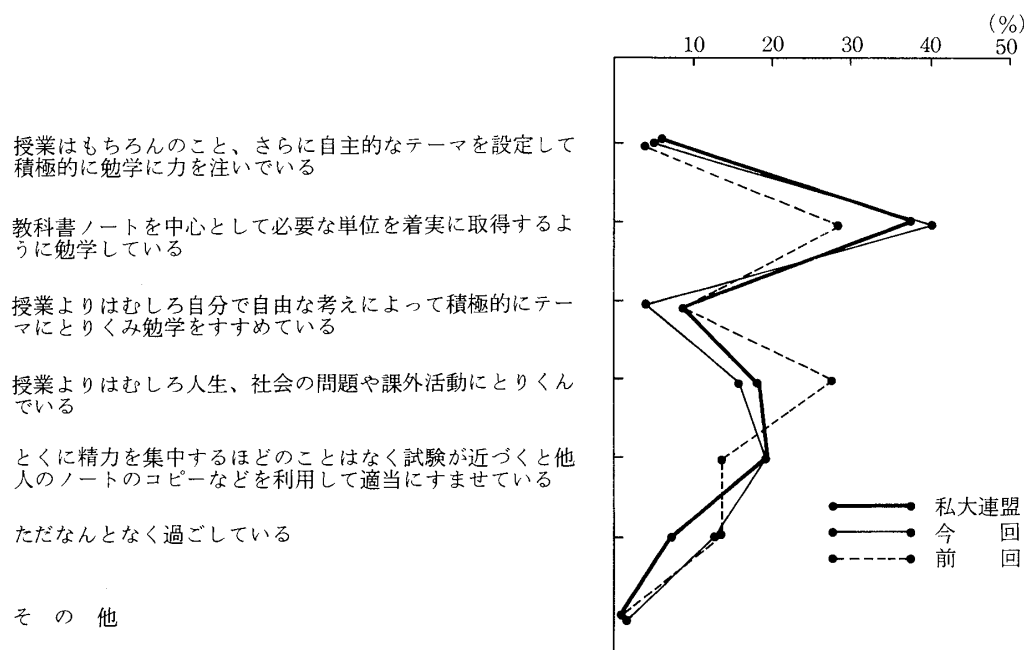


図 15 勉強態度

外活動に取り組んでいる学生が非常に減少し、その分だけ教科書、ノート中心の学生が増加している。この現象は本学のみならず現代の学生に共通の現象であり、それが授業時間外の学習（図書館、研究室、自宅）に費やす時間の減少にも結びついている。本学の学生は授業時間外の学習は「ほとんどなし」が56.7%、「約1時間」が23.5%であわせて80%にのぼっている。しかしこの現象も本学だけのものではなく、他大学の経済学部学生も同様であり、「ほとんどなし」と「約1時間」をあわせて半数である。別の調査で、勉強態度と学生生活の充実度の相関をみると、「とても充実している」と答えた学生は教科書、ノートといった授業に直結した内容、あるいは自主的なテーマあるいは自由なテーマ、また人生、社会問題、課外活動にも前向きであり、「かなり充実している」と答えた学生達もそれぞれが同じ数値を示していた。しかしながら「教科書、ノート中心で単位を取得している」学生は、「まあまあといった充実度」しか持てていなかった。

一方、「あまり充実していない」あるいは「全然充実していない」グループの学生達は、前向きの傾向は少なく、授業あるいは課外活動を含

めて自主的な姿勢も少なく、当然のことながら他人のノート、コピーを利用し、ただ何となく過ごしている態度がみられた。

4. 大学生の課外活動

——課外活動で得たもの——

「現在どのようなクラブ・サークルなどに参加していますか」という設問に対して、「体育系クラブに参加している」23.7%、「文化系クラブ・サークルに属している」18.4%、「学生会活動に属している」2.4%で、「何にも所属していない」学生は62.4%に及ぶ。課外活動に費やす1日の平均時間は、「ほとんどなし」65.5%「約1時間」9.1%、「約2時間」10.7%、「約3時間」6.7%となっており、大学生活の中で、クラブ・サークル活動に力を入れている学生は7.5%で前回の調査8.9%より更に減少している。

課外活動に参加する動機は、「友人、交わり、連帯を得るため」が21.8%、「自己の人格形成のため（協調、忍耐、責任感、リーダーシップ、自治意識等）」15.2%、「興味があり楽しむため」14.1%、「スポーツ技術の向上、競技への参加をするため」11.1%であった。前回の調査より「友人、交わり、連帯を得るため」が9%増加

している。これから現代の青年は、友人となるきっかけの1つとしてさらには自己を鍛えるために課外活動を考えていると思われる。

では「課外活動で得たもの」は何であろうか。「友人、交わり、連帯」が27.7%、「人格形成に役立った」12.8%、「学生生活にはりができた」10.7%、「身体の鍛練や、健康の増進に役立った」9.5%、「正規の授業では得られない知識、教養、技能を得ることができた」「スポーツ技術の向上がはかられた」がそれぞれ8.5%であり、クラブ・サークル等の課外活動に参加した動機と、課外活動で得たものが一致しており、本学での課外活動は目的に合致したものであると言えよう。

このように課外活動が、友人、交わり、連帯等、対人的な側面と、それによって得られる人格形成あるいは学生生活にはりができる等、学生生活を充実させる効果があるのに、なぜ課外活動が全体としては低調なのであるのか。それに対する回答は、「アルバイト、通学時間等のため、時間的に困難」が28.4%、「参加をしたいクラブ・サークルがない」が22.4%、「課外活動に関心がない」14.7%、「クラブ・サークルの在り方に疑問をもつ（クラブ・サークルの運営、人間関係等）」13.8%等があげられている。これを前回の調査と比較すると「参加したいクラブ・サークルがない」は減少しており、アルバイトの就労時間の長さが課外活動の参加を不可能にしていることがうかがえる。課外活動の低調傾向は、どの大学でも同じであり、課外活動に参加をしていない学生は全体の6割を占めている。これらから、現代の大学生は自分あるいは非常に身近な人との空間を大切にすあまり、対外的な活動に対して非常に消極的な態度をとる傾向があり、それがまた現代の大学生の経験の不足を招き、彼ら自身の弱さを招いている一因となっている。

Ⅶ 学生の大学への要望

1. 学生は授業をどうみているか

本学の学生は授業をどうみているのだろうか。

まず本学の特色であるゼミについては、「満足している者」が15%、「大部分満足しているが、一部内容が難しすぎたり、低かったりするものがある」23%、「満足・不満足がそれぞれ半分」が36.1%、「不満」が18.5%である。これを学年別にみると、高学年のゼミほど「満足」する割合が多くなり、4年次のゼミは52%の学生が「満足」しており、「不満」の学生は12%である。ゼミ以外の授業では、「満足」が30%、「満足するものもあるし不満足のものもある」が42%、「不満足」が26%であった。ここでも学年が進むにつれて「不満」の学生が減少している。本学では教養ゼミと称して1年次より全学生がゼミを受講している。まだ工夫の余地はあるが、非常に効果をあげていると思われる。というのは退学あるいは除籍者の数が3%台でとどまっているからである。

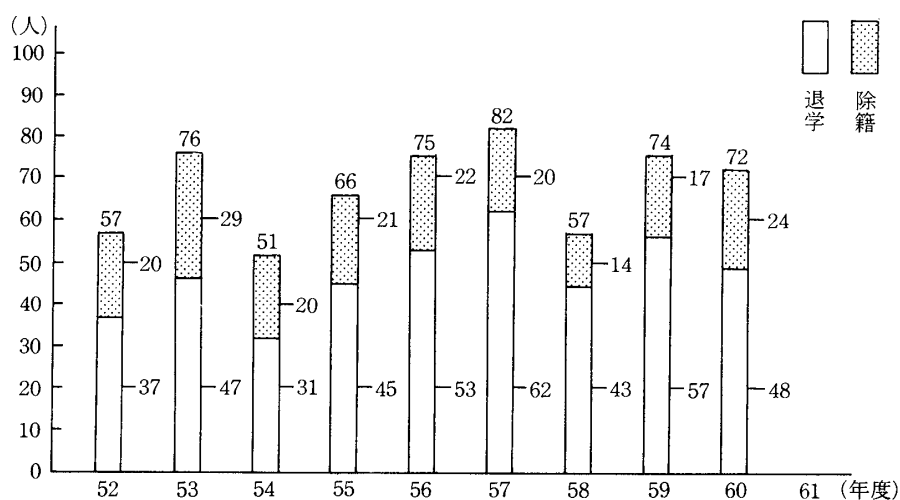
他の大学では「どちらかと言えば、不満」「非常に不満」をあわせて、外国語では49%、一般教養科目では42%、専門科目では38%、体育科目で35%という調査もある。しかもこの不満は学年が進むにつれて大きくなり、4年生では、外国語57%、一般教養44%、専門46%となっている。本学では逆に、学年が進むにつれて不満が減少しているが、それは、きめ細かい指導と、1年次からの教養ゼミが序々に効果を表してきたものと考えられる。すなわち大規模大学とは一味違う、小規模大学の手作りの授業の効果とも言えよう。

次に本学の学生は教師に対して何を要望し、何を期待しているのだろうか。調査結果によると、全体的に「教授方法を工夫し、学生の勉学意欲をかりたててほしい」24.2%、次いで「研究者であるとともに良き教育者であってほしい」22.6%、「学生ともっと個人的対話、接触の場を持って欲しい」16.7%が目立った。この傾向は、どの大学でも同様の傾向であるが、大学生生活の目的や勉学態度などの設問に対して積極的な考えを持つ学生ほど、教師に対する期待や要望が厳しいことがうかがえる。

学生の好む教師像は「ともに行動型」40%、

表 3 退学者・除籍者数推移表

	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61
1	19	17	10	13	30	22	18	25	15	
2	32	34	22	32	34	39	18	27	39	
3	1	11	4	2	2	10	8	7	4	
4	5	14	15	19	9	11	13	15	14	
合計	57	76	51	66	75	82	57	74	72	
学生総数 (5.1現在)	1,659	1,828	1,900	1,995	2,067	2,060	2,087	2,127	2,150	2,330
減員率(%)	3.4	4.2	2.7	3.3	3.6	3.9	2.7	3.5	3.3	



「相談相手」29%、「授業重視型」17%、「研究重視型」11%であり、大規模大学と違って、「無関心」は少なかった。

「大学生活は充実しているか」に対しては、「とても充実している」「かなり充実している」の2つで15%、「まあまあ充実している」が49.7%、「あまり充実していない」「全然充実していない」が合計で35.3%であった。高学年になるにつれて「充実している」と答える学生が多くなっており、学生自身の自覚による面も多いが、1年生に対する大学側の対応の仕方が重要なことがうかがえる。

2. 学生は大学に何を期待するのか

——楽しい学生生活を送るために——

学生が大学に要望したいことや期待したいことは何であろうか。回答の中で多いものは、「キャンパスの拡充、移転」25%、「学生の就職活動あるいは対策の充実」14%、「単位認定な

どの判定基準をゆるやかに」12.4%、「教室、実験室、図書館、正課体育の施設などの充実」10%であった。反対に学生の関心が薄いものとしては「学生自治活動」0.3%、「単位認定など判定基準をきびしく」1.3%、「奨学金、貸付金など経済的負担の軽減」2.4%などで、本学の立地条件に関するものを除けば、他大学との間に差はなく、楽しい学生生活を送りたいというモラトリアム志向の学生の声が伝わってくるようである。

Ⅶ 学生の友人関係

——大学生活を充実させるもの——

青年期の人々にとって友人は何よりも大切なものである。調査によると「本学に同性の親しい友人がいる」83.1%、「本学に同性、異性の親しい友人がいる」11.6%、「本学に友人はいない」が4.7%であった。この「友人がいらない」という回答は、学年が進むにつれて減少してい

る。「本学での友人をどこで得たか」については、「ゼミ」が26.9%、「クラブ・サークル活動」が19.7%、「高校からの同級生」が11.1%であり、大学でのゼミやクラブ・サークル活動は友人の輪を拡げることがうかがえる。また高校からの友人が多いことは、高校時代の友人関係の親密さや価値の高さを示すものであろう。

Ⅶ 学生の娯楽と嗜好品

——学生の日常生活について——

1. 学生の興味と関心

学生の活字離れが言われるようになって久しいが、「日頃、新聞のどの欄に関心を持つか」に対しての回答は、「スポーツ面」22.7%、「芸能、テレビ、ラジオ番組」22.4%、「社会（三面記事）」21.5%、「政治・経済」13%、「投書、天気予報、広告、その他」7.9%、「国際、外交」6.6%であった。この結果は他大学の経済学部（経済学部の学生とほぼ同じであったが、大学生だから、あるいは経済学部の学生だから「政治・経済」あるいは「国際、外交」面を読むべきだと考えるのは誤りなのだろうか。他の調査、たとえば日頃読んでいる雑誌についての回答でも「趣味（登山、スキー、音楽、料理、車）」が45%であとはすべて1ケタであり、「読んでいない」が40%である。活字離れが大学生にまで深く浸透しているわけで、学生の自覚を待つだけでなく早急に対策を打たねばならない。

では遊びや自由な時間をどうすごしているの

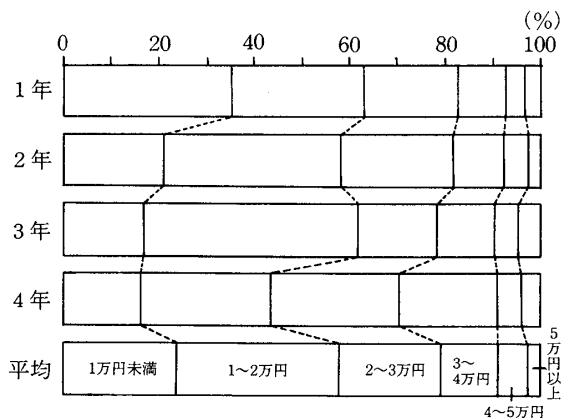


図 16 教養娯楽費

だろうか。これに対する回答は「友人との交際」24.2%、「テレビ・ラジオ・マイコン」16.2%、「映画・音楽などの鑑賞、創作」15.2%、「読書」8.9%、「スポーツ観戦や参加」8.4%、「ショッピング」8%、「マージャン・パチンコ」7.3%、「ただ何となく」5.8%であった。これらを「他の人々との交際」と「一人あるいはごく少人数との交際」の2つに分類すると、前者は24%、後者が76%となり、遊びや自由な時間の重要性を学生に意識してもらいたい気がする。すなわち余暇活動には休養、周囲の人との結びつきを円滑にする、創造的活動の3本の柱があるわけだが学生の時間の過ごし方は極めて少人数のつきあいに限られすぎているようである。それがまた現代学生の弱さの誘因の1つなのかも知れない。この現象は大学間の差はあまりないが、本学の学生にとって文化的欲求に対する充足の程度が低いことが、教養娯楽費や自由な時間の使い方に影響を及ぼしているのであろう。

2. 学生と飲酒傾向

「学生の飲酒傾向について」の回答は、「ほとんど毎日飲む」5.5%、「1日おき」4.2%、「2日おき」3.7%、「1週間に1度」18.5%、「たまに」56.5%、「全く飲まない」11.6%であった。全体としてみると学年が進むにつれて飲酒の量が多くなるのは他の大学と同様である、飲酒度と勉学態度や授業の出席度については、ほとんど相関関係がみられなかった。「なぜ飲むか」に対しては「つきあいのために」が80%を占めているが、「おいしいから」22.9%、「嫌なこと

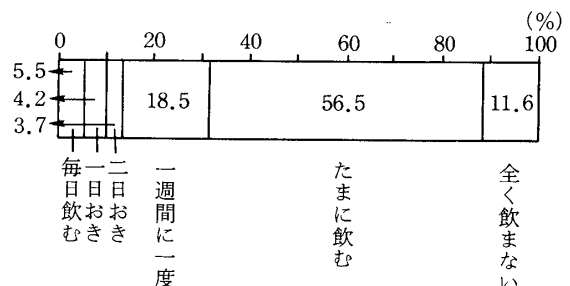


図 17 飲酒度

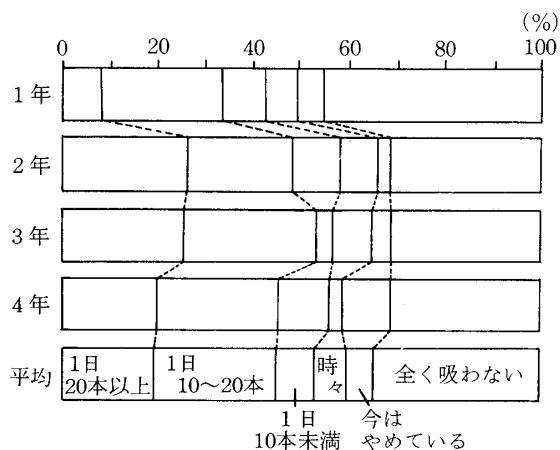


図 18 喫煙の程度

を忘れるために」15%など積極的な理由づけで飲んでいる学生もみられる。このように飲酒が対人関係の媒体として必要と考える学生の意識は行動の面にも出ている。たとえば飲酒が友人との交流や余暇活動と密接に関連しているのをあげることができる。また相談相手を多くもっている学生で酒をよく飲む者、88.9%、全く酒を飲まない者69.2%と両者にかなり差がみられ、日頃全く飲まない学生は友人の中に溶け込みにくい、という傾向がでている。

3. 学生と喫煙傾向

本学の喫煙者と非喫煙者の割合は6対4であり、他の大学と比較すると喫煙者の割合が多いことがうかがえる。全く吸わない学生は1年次45%だが2年次以後33%で以後変化がなく、喫煙の量などに対しても、飲酒と比較して健康に対する意識が高く、1日10本を境に数値に開きが現われている。喫煙している学生と同じ年代の青年を比較すると、他の大学と同様に学生の方が喫煙者の割合が多く、そこに問題があると思われる。

また飲酒度と喫煙の関係をみると正比例を示している。これは学生のみならず一般人についても言えることであり、飲酒と喫煙の習慣性と相乗効果が問題とされよう。さらには学生のストレス解消の重要な手段として、飲酒と喫煙があげられることが大きな問題点として指摘されよう。

IX 大学生と健康

1. 学生は健康か

——大学生の不安と悩みとその解消——

学生の持つ不安や悩みは何であろうか。当然のことながら第1位は「就職や将来の進路について」で25%、次いで「勉学上のこと」14.9%、「性格や能力について」10.3%、「異性や性の問題について」7.7%、「人生観について」7.1%である。これを前回の調査と比較すると、「就職や将来の進路について」や「勉学上のこと」が減少しているが、これは他の大学でも同じ傾向にある。これらから、現代の大学生は自分自身を見つめるということより、外部に対して自分をどう演出するかを大切にす新人類らしさが浮きぼりにされている。

「こうした悩みがどの程度なのか」については「非常につよい」「かなりつよい」「いくらか強い」の3つで60.7%を占めているが、学生相談室等の利用の減少を考えると学生相談にも工夫が必要であろう。

では学生はこうした不安や悩みをどう解決するのであろうか。回答によると、「自分の努力で解決する」30.9%、「友人に相談する」22%、「なりゆきにまかせる」21.6%、「家族に相談する」8.1%、「教師に相談する」2%、「医師に相談する」0.4%、「学生相談室に行く」0.4%であった。これらから友人の存在が非常に重要なことが理解される。この傾向は他の大学でも同様であり、相談相手は「友人」が58%、「両親」が18%、「先輩」が10%、であり「教職員や相談員」は0.5%以下である。友人が相談相手となりうる要素は、年齢が近いことで共感意識が持てることだろうが、相談することは気分転換あるいは安心感といったものが主になり、解決に至らず、問題が深くなる例もみられる。しかし大学側の努力にもかかわらず、このように友人を主とした身近な人が相談相手となっているわけで、学生の現状を充分理解した上でさらにきめ細かな対策を立てる必要があるのではないだろうか。

2. 学生の健康と疾病

——イライラしがちな学生——

「最近3年間で病気やけがをしたか」に対する回答は「全然しない」が54.4%、「外傷」が11.9%、「交通事故」7.1%、「胃腸疾患」6%、「アレルギー疾患」3%の順であるが、他の大学と比較をすると、「交通事故による外傷、骨折」が多くなっている。

日頃の健康状態については「ささいなことに對してイライラする」、「不安感」を持つことが多く、その結果として「食欲がなくなったり、眠れないことが多い」といった症状を訴える学生が出てくる。これらは、はっきりと病気と言えるものではない。むしろ半健康な状態にある学生が非常に多いことがうかがえる。この現象は学生のみならず、一般人についても言える事であるが、問題は、もはや大学といった環境が社会とまったく変わりが無いのではないかという点なのであろう。

X 学生はどこをよく利用するか

——本学の学生がよく利用する場所——

本学の学生は大学周辺の施設、商店などでどこをよく利用しているのだろうか。自宅通学生は大学の立地条件からあまり大学の学外に出る事はないようである。自宅外通学生がよく利用

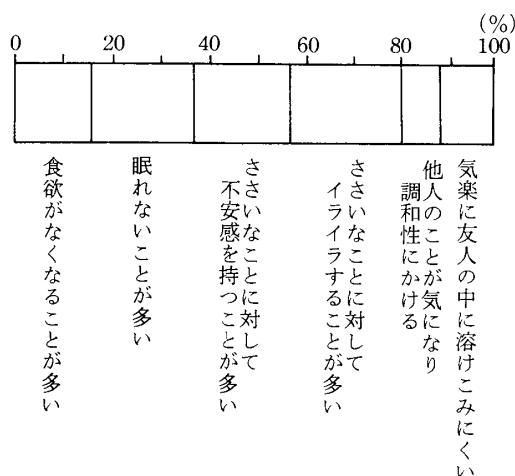


図 19 日頃の健康状態

する場所としては、「食堂・喫茶店」が20.7%、「書店」19.3%、「スーパー等の食品関係の小売店」18.6%、「マージャン・パチンコ店」7.6%であった。学内では食堂喫茶室が主であった。

XI 学生の夢と将来

——学生の就職観——

大学生の数が増加し、その大部分が卒業しているわが国では、大学卒業者がブルーカラーあるいはグレーカラーといわれる方面にも進出している。また多くの人の試算でも企業における役職者ポストの競争率は年々高くなっている。こうして昔のような職業やポストが約束されているとは限らず、就職してもその前途はかつての立身出世的なイメージに遠いとなれば、受験競争から解放されたひとときである大学時代をモラトリアムの時期として、つかの間の解放感を味わいたいというのが程度の差はあれ多くの大学生に見られる心情のようである。

さて学生は自分の将来について次のように考えている。「就職」83.9%、「家業を継ぐ、家事手伝い」4%、「大学院や専門学校」5.5%、「まだ決めてない」6.6%。当然のことながら、高学年になるにつれて「決めていない」は減少している。

「どんな職業につきたいか」という設問に対する回答は、サービス業、公務員、商社、金融

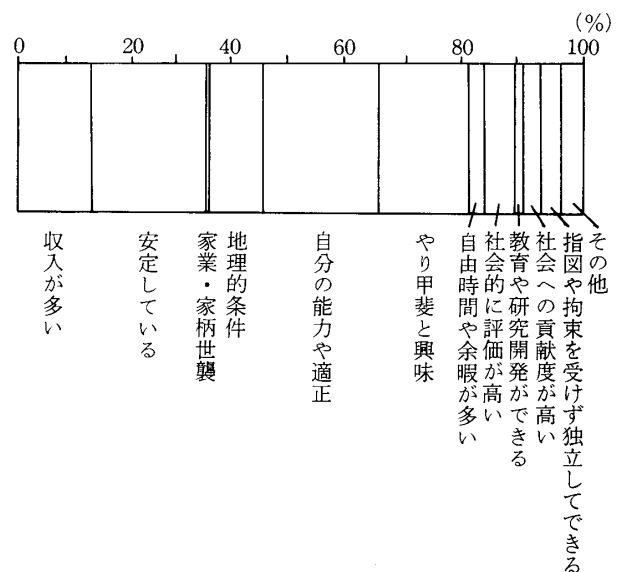


図 20 就職選択の基準（3つ以内）

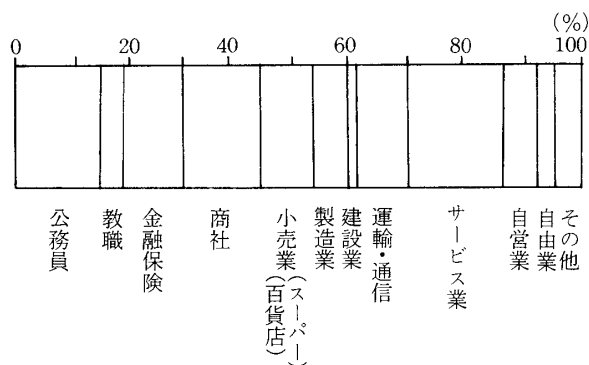


図 21 どんな職業を希望するか

保険業、卸売小売業、運輸・通信業の順である。さらにその根底にあるのは地元志向、安定志向であるが、それは特定の学部学科を除き大学間の差はない。

この進路選択にあたり、学生はどの要因を重くみているかについてみると、「安定していること」20.9%、「やり甲斐と興味」18.8%、「自分の能力や適性」18%、「収入が多い」13.3%、「地理的な条件」11.4%であった。前回の調査と比較すると、「やり甲斐と興味」あるいは「自分の能力と適性」を条件とする学生は減少しており、「収入が多いこと」や「地理的条件」をあげる学生が多くなっている。「社会への貢献度が高い」3.1%、「自由時間や余暇が多い」3.7%、「指図や拘束を受けず独立してやれる」1.9%などが続いているが、現在の学生の就職に対する見方は収入にウェイトを置くようになったと思われる。これはどの大学でも同じ傾向である。ある金融機関の調査によると、入社後3年たつと「会社を辞めたいと思ったことがある」のは66%で、半数近くが「給料さえあえば、転職してもよい」と思っている。「辞めたい」と思った回数は平均で4.4回であった。「辞めたいと思った理由は、「自分のやりたい仕事につけない」で複数回答で40%、「給料が思っ

たほどもらえない」36%、「仕事がつい」25%であって、一昔前の“猛烈”とは程遠いタイプが増えているようである。

XII おわりに

——大学生活の充実と青年の自立——

どうやらこの実態調査の報告も無味乾燥な数字の羅列に終始してしまったようだが、学生部に所属する1人として、調査結果は、ほぼ予想どおりの傾向であった。皆様はこうした数字を通じてどのような学生像を描かれているだろうか。

本学は流通経済大学という名の通り、現在では経済学部の単科大学であるが、本学への入学生ははたして経済の勉強をしたくて本学を選択したのであろうか。この実態調査でもうかがい知れるように必ずしも「経済に関する専門知識や技術の修得のため」ではなく、「4年間の自由時間が欲しかった」からであり、「青春をエンジョイしたかった」からである。そして本学に入学した学生は大学の授業や施設に多少の不満はあるにしても、全体として学生生活に満足し、4年間の自由と青春を楽しんでいるようである。しかし入学した当時はただ優しいだけだった学生が、就職して2、3年たつと「こんなにも成長したのか」と驚く程の変化を遂げる人たちの多いことも事実である。

今後私達は、社会や家庭から保護され、培養されてきた青年に、従来の人間形成あるいは知識・技能の伝達といったものと同時に、新しく幅広い経験の場を提供し、社会人としての素養を身につけさせ、新しい社会構想力を持った人間を育てることが重要であると思われる。そしてこの実態調査の数字の中に、その解決の鍵を見つけ出すことができるように思われる。